
センチメンタル

ランタン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

センチメンタル

【Nコード】

N6646A

【作者名】

ランタン

【あらすじ】

あの夏は私の全てだった――……優佳の一夏を描く。

ブローグ

失いたくないものがあつた。

それを守る以外に私の選択肢はない。でも、そのために全てを捨てたっていい。

儚い夢だつた。

今はもう、何もない——……

第一話 初夏の風香るあの日

昨日までの『私』が崩れ落ちていった。
まるでろいガラスのように。

「もう、部長をやめてくれないか」
そう顧問に言われた。

正直、それくらい覚悟の上だったから、どうってことなかったけど。

でも、彼にふられた時はさすがに苦しかった。

「なあ、これ、盗ろうぜ」

駅前の小さな雑貨店に私と彼氏の圭一は学校をさぼって来ていた。
「何いってんの。そんなの……」

突然の彼氏の言葉に私が動揺すると、彼は何とはなしに気軽に告げる。

「じゃあ別れる？」

私にとってその言葉はナイフのように鋭く突き刺さった。答えは決まっている。いつもそうだから。

私の手は自然と商品に向かっていた。

「まさか君がそんなことするとは思ってなかったよ」

担任の阿佐辺がため息をついた。
私も、まさかそんな事することになるとは夢にも思ってた
けど。

そして、あっけなく私の青春は破れてしまった。
むなしくなるほど、あっけなく。

「やっぱさあ、俺等合わないんだよ」
圭一は本当に軽く言った。癖なんだろう。もうちよつと重々しく
言ってくれたつていいのに。
そんな軽く言われてしまうと、私の圭一の溝が明るみに出てしま
うから。

こうして、私たちは別れを迎えた。
6月の初夏の風を受けながら……
でも、心が晴れることはなかった。当然だろう。
周りは私に対して一気に冷たく接す。親も友達も担任も……そし
て頼みの綱だった圭一でさえ。

誰でも言いから傍に来てほしかった。
私が私でいらなくなってしまうから――

彼と出会ったのはそんなどん底の時だったから、本当に塵のよう
に飛んでしまいそうな記憶。

「黄昏つていうのも悪くはないけど、とりあえずそのいて」
私が駅のホームにしゃがんでいると彼が声をかけてきた。
そんな言葉にも飢えていた私には、久しぶりの温かい人の温もり

を感じられるだけで嬉しかったのだ。そう。
だからそのときほっとした。

私はとりあえず、彼の言うとおりにした。今考えればいろんな人に迷惑をかけたと思う。

「どうかしたわけ？ 桜井サン」

彼はごく自然に、私の苗字を呼んだ。

私は、まだ気づいていなかった。

運命の歯車の作動に……

第二話 万引き

「どうして……私の苗字知ってるの？」

私がそう聞くと、彼はしばらく黙ってから悪戯っぽく言った。

「内緒」

なんだかバカにされたような気がしたけど彼の言っている事が正しくないわけでもないの、私は黙って俯く。

そうすると、彼は私の考えを見透かしたように告げる。

「気にしなくても、俺の言っていることが正しくなかった事なんてないから」

どうやら彼は相当の自信家みたいだ。

「あんた誰？」

答えるわけもないだろうと思いつながらも、冗談半分に聞いてみる。

「俺？俺は、内田淳平」

聞いた事のない名前だったから、さらに私の名前をどうして知っているのか気になった。

でも、聞かなかった。

いや、『聞きたくなかった』のほう为正しかったのかもしれない。

「……忠告どうも」

それだけ言つて、私は彼から離れた。

ケータイが不意に鳴る。久しぶりの電話に胸を高鳴らせながら私が画面を見ると、友達からだった。

「何？」

すると、友達の声が冷たく告げる。

「悪いけど、万引きした子なんかと付き合つなって言うお母さんか

らの注意があつたもんで」

いつもは『母親なんかうざいし、無視してるから言う事なんか聞いてない』と言っていた子だったから、少しだけ悔しくて唇を噛んだ。

すぐに電話は切れて、後味の悪い空気だけを残す。

もともとなることくらいは覚悟していたはずだった。
なのに、どうして？

どうして、涙がこぼれるんだろう……

家に帰ると玄関は暗く、リビングにしか明りがついていなかった。
「万引き、したんですってね」

お母さんはいつになく青ざめた表情で静かに言った。近所の噂に
でもなっていたんだろう。

「……………」

お母さんは顔色1つ変えない私にいらだったのか、私を睨みつけて、

「もう、学校行かないでいいわ」
と言った。

私だってバカじゃないから、こんな表情の母親のまえで笑ったり
なんかしない。

でも、心底笑いそうだった。

「お母さんだってわかってるでしょ？ 私が自分から進んで万引き
してない事くらい。」

「わかってるわよ」

めんどくさそうにお母さんが答えた。それは「おもちゃ買ってくる？」と聞いた子供に母親が答えるときと同じ言い方だった。

「っ何とか言いなさいよこの恥知らず！」

そんなことを考えていたら、お母さんはいきなり私の頬を打った。
私は、痛いとかそういう前に思った。

もう、私はここにいるような人間じゃないんだってこと。

気が付いてしまったから——私は家を飛び出した。

第三話 家出

私は自分でも気づかないほどすばやく、家を出ていた。

「・・・私。」

どうしてこんなところにいるの？

駅の近くまで来て、思った。

お金だつて一銭も持っていない。

「どうしょ・・・」

誰もあてなんかないし・・・（万引きしたから）

その時だった。

「まだいたのか、おまえ。」

「淳平！」

そう言つて私が淳平に抱きつくと、淳平は少し拒んだ。

「もう呼び捨てかよ・・・」

でも、私を引き離したりはしなかった。

私が全ての事情を話し終えると、淳平はぼつりと言った。

「それはおまえが悪いよ。」

「どうしてそんなこと言うの！？私はもう行く所もないのよ！」

淳平は私をたしなめるように睨んだ。

「あのなあ、普通親つていうのはそんなもんだ。子供が心配でたまらなくつて、つかつとなるんだよ。」

「でもっ・・・」

「それに、心配させるようなおまえもおまえだ。」
ずばりと淳平に核心を突かれて、私はちよつと肩をすくめた。

「万引きなんかして、親が心配するのは当たり前。だからすぐ帰れ。」
それだけ言つと、淳平は私にぬるいジューズを渡した。

「もしどうしても嫌なんなら、野宿でもしろ。」
淳平は私から目をそむけた。
「・・・うん。」

それから私は家に戻つた。
お母さんはまだ少し怒つてゐたけど、私が戻つてくると、
「・・・ちよつと悪かつたわ。ぶつたりして。」
そう言つて、私に謝つた。

別に嬉しくなんてなかつたけど、なんかほつとした。

『もう呼び捨てかよ・・・』
淳平の言葉を思い出す。

あの時は必死だったから、呼び方なんか気にしてなかつたけど・・・
あれ？

私、どうしちゃったんだろう・・・

顔が熱い。

第四話 想い

あれ？

私、どうしちゃったんだろう……

どうして、こんなにときどきしてるの？
心臓がばくばくいつてる。

「そりゃあ、恋だね。」

さらりと親友の麻衣が言った。

「……恋？」

「あたりまえじゃん。」

「なんで？」

「だって、その人の事考えるとドキドキしちゃうんでしょ？」

……その通り。

「また、その人に会いたいって、思うんでしょう？」

……またまたその通り。

「そうだよ」

「なら、絶対そうだね。なんだったら、告白しちゃえば？」

「無理だよ……」

無理。

だって、そんなことを気軽に言える関係じゃないもの。

私は彼に借りがあるから、彼を混乱させたくない。

おかしいかな？

「ま、あんたがそう言うならしょうがない。私も何もしないよ。」
そう言って、麻衣は廊下へ出て行った。

もともと、私がおかしいのかもしれない。

淳平に迷惑ばかりかけて、あげくの果てには『好き』だなんて。私が淳平だったら、そんな女は嫌いになる。

そう考えたら、やっぱり私は無理なのかな、って思っちゃう。

私の、好きな人。

でも、叶うはずなんかない。

私はそう思う。だって、彼が私を意識してくれているはずがないから。

だから、諦めよう。

素直にそう思った。

「あ、おまえっ」

いきなり声をかけられて、私は戸惑った。

「……何？淳平さん。」

「別に『さん』つけなくていいから。……あと、これ。」

淳平はポケットから何か出した。

「？」

「あ……ちょっと、福引で当てたけど、いらなかったから。」

私の手のひらには、飴玉がのつていた。

「……ありがと。丁度ソーダ味食べたかったから。」

「あっそ。」

そう言つて、淳平は手を振りながら私から離れていった。

私は、自然に笑顔になっていた。

第五話 気持ち

でも、私は淳平の何も知らない。
だから、淳平を想う事は無駄かもしれない。

それでも。

私のその思いが途切れないうちは、隣にいたい。
それさえも、駄目？

「優佳は、引っ込み思案っていうか……考えすぎるんじゃない？」
いきなり裕美姉ちゃんが言った。

「好きな人くらい、誰にでもいるわよ。まあ、その感情をどうするかは個人が決める事だけだね。」

「うん……」

そうかもしれないな。

何も知らない事ほど、頼りない事はないと私は思う。

だけど、心臓がばくばくいつてうるさいのは、どういふことかくら
いはわかる。

『好き……っていうこと。』

あの日もらったソーダ味のキャンディは、今もまだポケットに入っ
てる。

食べたくないわけじゃない。

食べたら、消えるのが怖いだけ。

変な話だけど。……キャンディが溶けるのは当たり前だって言うこ
とくらいわかるけど。

でも、この気持ちをなくすことが怖い。

溶けてしまったキャンディみたいに。

「……私なんか、無理だよな。」

淳平が私を選んだりするかな？

もし私が淳平だったら、そんな女選んだりしない。

「まだ早くない？」

裕美姉ちゃんが言った。

「……何が？」

「だって、あんたは何にもアピールしてないし、ただ話してるだけでしょ。それだけで、好きとか嫌いとか決められるわけないじゃん。」

もっともだった。

正論。

「逃げてただけ……だったのかな？」

明日、聞いてみようかな。

淳平に。

「私のこと、どう思ってる？」
って。

第六話 儚きもの

淳平が好き。

それは変えようのない、1つの『気持ち』だった。
泣きそうになるくらいにもろくて、儚いもの。

圭一や、友達に対するものと同じ。

ふわふわ飛んでいるシャボン玉みたいなもの。
いつか、消えてしまいかもしれない。

不安がある。

怖い、というのもある意味正しい。

淳平に嫌われるのが、拒絶されるのが、怖い。
でも、信じたい。

淳平にこの想いが伝わる事を。
信じる。

「どうしたわけ？」

いきなり淳平に肩をたたかれて、驚く。

「えっええっと・・・」

あたふたする私の姿が面白いのか、淳平はけらけら笑った。

「そこまで驚く事ねえじゃん。なんか俺にばれちゃいけないことでもあるわけ？」

本当に、淳平には油断できない。

からかってきたと思ったら、いきなり核心を突いてくる。

「……」

「お、図星？」

真っ赤になってうつむく。

こんな姿、本当は淳平に見せたくない。

「……淳平」

「何？」

「私のこと、いつもどういふ風に見てる？」

淳平は、一瞬まばたきして、私を見た。

「……仲いい友達って見てるよ。」

友達。

もしこの言葉が、本当に仲がいい友達に言われたなら、とても嬉しかっただろう。

でも、今の私には——……

ただの辛い言葉としか受け入れようがなかった。

「——うん。ありがとう。」

やっとの事でそう言っ、私は淳平から逃げるように走った。
涙が出た。

全てが他人事みたい。

たった今言われた言葉も、圭一に振られたことも、友達に絶交された事も。

全てが、自分の事に思えない。

結びつかない。

それは、おかしいこと？

第七話 涙

涙が絶え間なく私の頬を流れる。
いつそ消えたかった。

淳平の声が、いつもより、私の心に響いてる。
耳をふさいだ。

でも響く。

淳平の声が……

『仲いい友達だって見てるよ』

近づけたと思っていたのは私だけだったのかな？

「……………桜井？」

声がした。

淳平じゃない事はわかったから、顔を上げた。

「浅野……………どうかしたの？」

「こつちが聞きたいんだけど」

浅野はクラスメイト。

圭一の親友でもあるから、このごろは避けていた。

私が顔をそむけると、浅野は言った。

「……………何かあったのか？　まあ、圭一と万引きして別れたのは知ってるけど」

「何にもないよっ」

浅野に全てを打ち明ける気はなかった。

圭一とつながっている人に何も言いたくなかったから。

知られたくなかった。

私の心の中なんて。

誰にも。

淳平が好きだったことなんて、誰にも打ち明けるつもりなんかない。
私が好きだった人。
どうして？

近づいたと思ったら離れていく。

「……俺は、桜井と圭一が別れて正直嬉しかったけど」
浅野が言った。

「へ？」

「俺、桜井好きだから」

浅野はまっすぐに私を見ていた。

私は今、どんな顔をしてるんだろう。
困ったような顔でもしてるのかな。

「……」

何も言いたくなかった。

淳平は、今どこで何をしてるんだろうか。
今すぐそこへ行きたい。

誰にも言わずに、秘めた淳平への思い。

それは、運命の歯車に拍車をかけることになる――……
そんなことも知らずに、私は浅野をじっと見ていた。

すっかり乾いた涙。

どうして乾いたかなんてわからないけど、どうやら……
淳平のことなんか忘れてしまったみたい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6646a/>

センチメンタル

2010年11月2日02時12分発行